

共同討議・農村過剰人口と家族構成

研究通信

別集 1.  
1956年4月刊  
村落社会研究会  
編纂部  
丁平片市台  
教育大学  
内研究室  
部

第三回大会 共同討議記録

(日時) 昭和三十年一月一八日  
午後二時半 - 四時半

(場所) 毎日新聞大阪本社講堂

司会者 喜多野清一、木下彰、福武直  
参加者 蓮見音彦、中野芳彦、東家清次、服部治則、並木正吉、R.C.F.I.T、森正夫、井森隆平、安藤愛一郎、伊里修一、中野卓、竹内利美、内山正照、山岡栄市、生田清、原宏、北川隆吉、松原治郎、山本登、諏訪園岩雄、島崎稔、後藤和夫、小池基之、有賀喜左エ門、中島龍太郎、南清彦、甲田和衛、西田春彦、大内秀明、森井、

(着席順)

〔喜田野〕……今御報告をおき、したのでありますが、問題はかなり多岐にわたつてゐるようになっています。当初「研究通信」等で一般に御通知申上しましたが、農業経営と密関せしめて、農業人口の

本日拜聴しましたところでは、これに焦点がぼやけているとは申しかねます。

いづれにしても農業経営はどなたも取上げておられるようであり、それをさらに社会学的に家との関連において特色づけられていることも、一つの大きな特徴であると思います。これは今回そこまで行くのは難しかろうということだつたのですが、そういうことにはだわりなく進められました。

そこで農業経営の問題も含めて家の性格と関連させて、農業人口、特に過剰人口ということ、最初に論議されるかと思ひます。その中で小池さんから、かなり経営に結びつけて論じられておりましたが、時間に制限されて大へんお急ぎになつていたようでありますので、この際もう一度要点を説明して頂けると、話を進める上で、大へん好都合かと思ひますが、如何なものでしょうか。

〔小池〕……人口が過剰であるか過剰でないか、ということの問題にする時、何について、人口が過剰であるか否かを明確にしなればいけないと思ひます。労働力の需要に対する過剰とは、資本主義的経済の中での問題なのです。農業における過剰人口の問題にする場合でも、基本的・典型的には、資本制生産が農業に行われ、そこに機能する資本が蓄積されて、農業労働力に対する需要が相対的または絶対的に減少して、過剰人口が停滞するということ形だと思ひますが、日本の場合には、一応資本主義的な生産が農業では行われておりませんので、それを小農経済の中にもつてきて、どのようになつておられるか、といった問題になつてくるのではないかと思ひます。もちろんそこで、そのような相対的過剰人口には、資本の蓄積ことに資本の蓄積、資本構成の高変化を背景においておつて、日本の農村の過剰人口をつかむ上に、その理解を歪めることにはなれないかということも、もちろん反省しなければなりません。しかし概念としてはそういうものから借りてきて、それを拡充して小農の中で、どういふ風に過剰人口が潜在化しているのかを確かむより仕様がなれないかということのように思われるのです。どう改めますと、結局、小農の場合は資本が農業を外からとらえる

わけですから、それによつて資本の蓄積が阻害される。このこと自体が農村の人口を過剰ならしめる一つの要因として作用する。そしてその中でそういう人口の停滞性自体が生産力を低いものにするから、従つて生活水準も低くなる。だからそこで過剰人口が潜在化する、というように理解されるのではないだろうか。……そういうわけでは経営との問題をか行つたわけですが、……そういう過剰人口の潜在化とならんで経営の中で労働力が農業外または農村外に出て行くという場合、すなわち農外労働力に対象化される場合、日本の農村では往々にしてそれが安定した形で賃付化されてはいない場合がある。そういう形の不安定性が、山稼ぎとか農村日傭とかいわれるものにはあるとすると、そこではやはりそれを停滞的な過剰人口としてつかんでいつていいのではないかという風に考えたいわけでは。

〔喜多野〕……そうしますと、相当地域差の問題が出てくるだろうと思ふのですが。つまり、日本の農業における資本主義化の程度は、地域的にかなり大きな差をもつてゐる。東北のように、山林をもつてゐるところでは、山林経営はかなり生の人間労働を必要としてゐる。そこで仕事と関連して、地域的な差の問題になつてくると思ふます。

〔小池〕……近郊農村の場合と、平坦部と山村の場合とは、過剰人口の具体的な存在形態は非常にちがうと思ふのです。たゞ、一般的にいつて日本の農村が資本主義化しないところ、実は過剰人口の特殊な潜在化という問題が、日本の場合にあるのではないかと思ふのです。

〔並木〕……ちよつとお伺ひしたいのですが、相対的な過剰人口の場合ですね。農家人口に適用する場合、厳密に狭義に考えれば、今おつしやつたように、日本では資本制生産は基本的に農業にないわけですから、農業における相対的過剰人口の形態としての潜在失業はその限りでは存しない。たゞ工業における、本来は流動的過剰人口になる筈のものが、農村に返されて、農村にたまるということ、例えば、「出稼ぎ型」とか、「失業者の帰農」とかいわれるそういう時期があつたわけですね。それは潜在的な過剰人口の一形態だと

いう理解が今まであつたように思ふのです。もう一つは、農業に必要でない人口それ自体が、日本の資本主義のうんだ産物でしようが、それを吸収する余地は農業にもなければ、工業にも充分にない。その場合、工業に一段出たものが農村におしこめられてゐる、或は工業に出るべき人口が農村に停滞してゐる。この形だと思ふ。それで現在、農村にどれだけ過剰人口としての潜在失業人口が推察してゐるか、ということが問題ですが、農村に押し返され、或は出ないでゐる人口とはどんなものか。大体長男は農村におさまるし、次三男は出てしまふ。現在農村にたまつてゐる人口は、新しく労働力人口となつたが、未だ出れない人達が主で、敗戦によつて押しもどされた人達は量的にはかなり出てしまつてゐて、たまつてゐるのは少ない。しかしその量的な少なさが、相対的・潜在的過剰人口の低さを示すメルクマールになるだろうか。というのは、経営のあり方と結びついて、はじめて労働力としていくら必要とし、いくら必要としないか、ということが、定つてくるのですから、たゞ一がいに潜在的失業人口が少なくなるとかたくさんあるとはいえないと思ふ。この点はどうなんですか。

〔小池〕……今おつしやつたのは、現在の日本の農業経営をいつてそれに対してどれ位労働力が必要か、その上でどれほどたまつてゐるかを量的に把握しようといつた点だつたと思ふのですが、一方で現在の農業経営を固定して考えようとする考え方をめぐつての問題と、もう一つは、経営によつて技術的に必要な労働力人口と、その経営の生産力によつて、そこに維持される労働力人口との問題が考えられるのではないか。農村における潜在的過剰人口を、相対的過剰人口の概念を拡張して考えたとすれば、生活水準が低いまゝでそれにもかゝらず、現在の経営の生産にこれだけの人口が必要だという関係の中にふくまれてくるのではないでしようか。

〔並木〕……結局問題はこうなのではないでしようか。経営技術的にいへば、今の労働力でも極端にいゝますと足りない。しかし他方所得の面で見れば、低い生活水準しかできない。その低い生活水準にある人口が、何時頃から、いつの時代から相対的過剰人口となつたのか。低い生活水準は明治の初めからある。経営技術的には頭数

からいえば、明治の時代と大きくはいつて大きく変化するほど生産力の発達はなかつた。条件はほとんど変つていない。それがある時期から相対的過剰人口といわれてきたのは、どういふことなのか。やはり他産業との関係において、歴史的に変化があるのではないのでしょうか。

〔小池〕……そうですね。資本主義体制下に於ける潜在失業人口を問題にするなら、資本主義的生産の方法が確立したということですね。そういう関係がなければ農村内部での労働力の過剰はでてこない。それ以前の時期では、労働力の使用価値はいえませんが、労働力の価値は一般的にはいえない。

〔並木〕……もう一つは潜在的過剰人口と今むつしやつたのは自家労働力の評価ですか。……………

〔小池〕……客観的評価、自家労働力の客観的評価……………

〔並木〕……もうひとつと御説明頂けないでしょうか。客観的評価という意味について。

〔小池〕……出てゆけば、これだけに評価される、という評価がつかれてくるということ。潜在的過剰人口はいわゆる「潜在的」目には見えない、それが顕在化するのには、出ていつて労働力の評価が与えられる、ということを通じてです。

〔並木〕……で、この場合、突は一つの問題が出て参りますのは、「出てゆけば」つていふ風にいわれるわけなのですが、突は基本的に次三男がいれば誰かは出てゆくが、〇〇〇は家からの解放がなかつたのではないか。今まで基本的にいけば自家労働力の評価も、突は家に結びつけられた範囲内で進んでおるだけであつて、これが家から解放されるといふ形で自家労働力の評価がなされるか、ということが問題ではないでしょうか。例えば、移動という問題を考える時には、そこまで考えないとだめだ。自家労働力が評価が進んだ、だから潜在的過剰人口だ、と、つてもいいか。これは助かないと思ふ。

〔福武〕……客観的評価といわれたのですが、労働力としての評価といふことは、どうなんですかね。とにかく潜在失業人口とかつていふことは、大きな問題です。……………、のくらやつたつて、いつ

までたつたつて結論は出てこない。(笑声)それで今並木さんがいわれた家に縛られている、という問題に懸念したいと思ふのですが、何故それじや家に縛られているのか。本来的に縛られているのか、どういふ条件が縛らざるを得ないのか、ということを考えてみたいのですが。

〔小池〕……そうですね。その一つは農業それ自体がもつ食糧生産という内容だと思ふのです。

〔喜多野〕……食糧生産というのは自給だということですね。

〔有賀〕……それはもちろん大切ですが、日本の場合には資本主義が発達した後でも家族労働を主体とする農業の経営という形ものが、存在しているのだから、やつぱり日本では欧米と同じ形で資本主義が発達しなかつた。それは資本主義が日本に入つて来た時何に結びついたかということになるのだと思ふ。このことが農村にも大きな影響を与えていると思ふのです。資本主義の側からみれば、日本のように家族制の非常に強い社会へ入りこんで行くと、それに結びつかずにはいえないと思ふのです。

〔小池〕……それは残しておかなければ、つまりそれが土台となつていふという関係から、家の制度が結びつくというのでしようね。

〔有賀〕……その家の制度も今では変つた。家族関係は突際にもかなり民主化されて来た。例えば家長権にしてもかなり弱くなつたし、男女の階級も余程変化した。特に直系とか傍系とかの差別もなくなつたといつてもいい。そうすると、新しい時代の家族関係は簡単に對等的だといえないほど大へん変わつてきていると思ふのです。

それなのに、いせんとして家の制度ないし家を残さねばならないといふことは、相当大きな問題だと思ふのです。これは恐らく、社会政策の貧困や経済的貧困を生ぜしめて来た各時代の政治制度と関連させて考えなければいけなと思ふのです。そうでないと簡単に説明出来なない。

〔小池〕……そこで家の制度つてことをもう少し厳密に御説明頂けないでしょうか。

〔有賀〕……今日では家の制度といつて僕いかどうか疑問ですが、大体家屋を守つて行くといふ考え方にたつ家の存続の考え方ですね。

つまり戦後農地改革などで民主化ということをしわれてきたけれど、農地改革の後でもやはり農民は小所有者となつて、非常に強く家を守つてゆく気持があります、これがやはり問題だと思ふのです。すでに資本主義でも、これをつぶすことが出来なかつたし、今度の改革でもそうであつた。これは例えば、戦前の資本主義について見れば、財閥の構造は非常に面白いと思ふ。それは例えば三井をとると、三井の十一家が三井財閥の中心となつて持株会社を作つた。その持株会社は株式会社なのだが、株というものを家産として保持していた。その資本構造をみて、傘下のAクラスの直系会社の株はいふん大きく持つているが、Bクラスになると全体の一〇パーセント内外で、人事権をにぎつて充分に支配できた。株式会社という方々から株式を集めてきているようだけれど、一方は株で支配し、一方は人事で支配し、それを三井十一家が家産的に持つていた。こういうことは他の財閥にも通例であつたが、この事は日本資本主義の構造をみる場合には非常に大きな問題だと思ふのです。

〔小池〕……日本の資本の特質ということ、もちろん考えなければならぬ点です。

〔喜多野〕……家族の生活形態といへば、やはり家の制度の姿ということになりませんが、家族の生活形態はやはり変つていふと思ふのですがね。農村においては家族生活形態は、やはり農業への資本主義の優入程度、あるいは貨幣制度との連携の差などによつて變つてきているように思ふのです。従つてまたそれが過剰人口の問題に絡つて行きますと、市場との連携とか地域差とかの問題に結びつくような気がするんですけど。

〔山岡〕……(発言あれどき、とれず)

〔喜多野〕……労働力の問題、動力機械の導入などの問題をもふくめて経営形態と、そこにある過剰人口の生活との関連が問題になると思ふのですが。そこでさつき並木さんのいわれた「外に出てゆく」という問題も、やはりこゝでは「出て行く」というだけではなく、どの程度に出て行くかというところが、地域々々の貨幣経済の発達段階の中で、それぞれ評価されるのではないでしようか。ですから外の評価が中へ入つてきて、そして中のいるな伝統的な労働関

係や伝統的な雇傭関係が、だんだん近代的なものに切り変えられて行く過程を問題にして行く、……そんな気がするのですがね。

〔升内〕……さつきおつしやつた、「家に縛られている」ということなんです、農業人口の問題を考へるには、農家の家族動態と関連させてみなければならぬ。つまり農業以外の仕事につくものと、農業を引きつづくものとの関係、家から出て行くものと、家に止まるべきものとの「からみあい」から考へて行かなければならぬと思ひます。農村人口の移動する具体的な形は、こうした家族動態をめぐりいろいろの慣行にも規制されている。人口移動と相続や、分家の問題との関連をみる必要があるかと思ひます。

〔南〕……和歌山の農村についてちよつと申上げたいと思ひます。農村といふまじても、災害をうけた山村についてですが、家にしばられるという点について、都市に比べて農村にいた方が、長男の場合容易だからというお話ですが、私の調査しました山村では一九三三年の水害後離村者が相当出ると予想されていたのですが、実際にはそれほど多くない。この場合離村者が多くないのは出られないからです。都市へ出て仕事がない。村にいればともかくも失同体的な古い縁故関係があり、何とか山仕事もあり、また災害工事もある。だから出たいんだが出られない。そういう恰好で比較的山に残つてゐるものが多いのです。さつきのお話とちがいますので、ちよつと申上げてみました。

〔井森〕……過剰人口ということをしわれますが、今までのお話では経済学的観点からみておられるようですが、社会学的な見地から過剰人口は考へられる。例えば農村ではお祭りなど青年がおらなると出来ない。経済的に豊かになつても或る程度の人口がないと農村の社会生活は満足にできない。過剰人口の問題は経済だけではなく社会的な面からもみなければいけないと思ふのです。また生活水準についても、例えば農作業が機械化されて暇ができると、たとえ経済的にはよくならなくとも、信仰、教養、娯楽などにむけ得る時間的余裕が生じ、それだけ生活がよくなつたともいえる。こうした場合経済学者たちは必ずしも生活水準が上つたとはいわぬ。こうした点社会学的というか社会的な見地から問題をみて行かなければ

「はいけないと思うのです。」

〔福武〕……「農村は不安定だ」ということを先ほど山岡さんがいわれましたが、私はむしろ労働者の方が安定性に乏しいこと大きな問題があると思う。下層の貧農は別ですが、農家の方が安定している。とにかく「めし」が食えるという点では安定している。だから原君の報告にもありましたが、家では農業をしながら、ひまがあるが、家にしぼられる条件には、農家の生活のこうした安定性というようなものがあるのではないか、これに対して労働者は低賃金であつた上に、失業の不安があり、これに對して労働者は低賃金くなる。農民より生活の安定性がなわけです。だから安全なプロレタリアートとして、もつとも安定した生活をして行ける。見通しがつけば、「家にしぼられる」という気持もほとんど消失して行くであろうと思うのです。それがなければ南君がいわれたように、土地が荒されてもお残るといふことが生じてくるといえるのではないですか。

〔喜多野〕……南さんと原さんの場合とでは非常にちがつている。九州の場合、鹿児島、宮崎から出稼ぎに出工、福岡や北九州の比較的条件のよい農家に年雇に入つている。そして北九州の農家の雇子は月給取りになつてゐる。それとさつきの南さんのおつしやる場合とはちがつてゐると思ひますが。

〔福武〕……地域性というか、自然的条件についてはですが、近くのセンターとしての都市の性格、地方全体の産業構造によつても、またそれらと裏はらの文化的水準も問題になるでしょうが、単なる自然的条件だけでどうこういふことにはならないのではないでしようか。もし家を守るつてことが、本質的なものであれば、例えば経済的に豊かになつたものが村に居て、村から出ないといふことにはならない筈だ。すなわち、半農ができれば学校にやる。出来ないものに農業をやらせるといつたことは出て来ない。家を守るということも、本質的に伝統が強いものであれば、半農ができて家は大抵なんだから、長男だから家を守れ、お前の方がしつかりしてゐるんだから家に残れ、といつたことになる筈なんだが、現実はそのやうでない点

をみますと、基本的にはどつちが重要かは知りませんが、小池さんがいわれた低賃金と食糧自給生産が強く支えている。基本的にはそんなものではないでしようか。木下さん、どうですか。

〔木下〕……大体同感です。たゞ農家の仕事は食糧生産であるといふ性格。これは正にその通りでだけれども、経済学をやつてゐる者が農業を食糧生産という性格だけで問題にするのはおかしい。(笑) どういつた使用価値的視点は、あなた(小池氏)とか私の場合、これを捨象した方がよい。それはとにかくとして、福武さんのいわれる農民の低賃金または低所得と農業における自給生産の大きなウエイトという点は、農民をより強く家にしぼりつけているといふ事実と密接な関係にあると思ふのです。つまり、農村における潜在的または潜在的過剰人口の存在と半自給的生産とは必然的な関係にあるのです。半自給的といふことは、半商品生産的といふことになりませんが、この後の方の性格は著しく解放的であるのに小商品生産の悲しさで、自由に発展するだけの合理的基礎をもつておらず、大工業や商人からいつも圧迫される側面となり、結果は低所得を突現することになり、それが半自給的な面での自衛的、封鎖的性質におつかふさることになるわけでしょう。このように過剰人口の存在を規定する条件は、少くとも経済的には農家所得の低位性にあると思ふのですが、そうすれば問題は農家の貨幣経済面に通ずる日本の産業経済全体の動向との関連で考えられなければならないことにならぬではないでしようか。

〔喜多野〕……そうしますと、木下さん、どうでしようか、先ほど小池さんが過剰人口を論じられました、その論議の筋みちの中へ、小農経済をとりあげてゐるのはどうでしようか。

〔木下〕……私も日本の農村過剰人口の存在形態とその性格の究明のためには、小農経済の性質の検討が基礎的な問題になると思ひます。経済学上の過剰人口という概念は、いうまでもなく相対的過剰人口ないし失業といふ資本主義経済特有の法則的現象であります。日本の農業それ自体はこのよゝな意味での過剰人口をその内部で法則的に創出するまでに資本主義化してゐない。それにもかゝらず、大多数の農民は他産業経営者や支配的企業労働者等よりも小さい所

得、したがって低い生活水準のもとで、過勞に陥つてゐるという事  
実、即ち過剩人口の存在が確認されてゐるのですから、それは農村  
を含めた日本の資本主義全体の相対的過剩人口が農村や農家に潜在  
化し停滞してゐるものとみる外はないでしょう。ところが、このよ  
うな過剩人口のプールとなるのに、わが國の農家は実にあつらえ向  
きの組織と経営をもつてゐる。それは先ほど申しました半自給的、  
半商品生産的農業の遂行者という性格であつて、つまりは小農經濟  
が日本の資本主義經濟の發展の条件としての過剩人口の担い手とな  
つてゐるということなのです。そして、このような小農經濟は生産  
と家計が未分離であるという点で、家族制度というものと、きん密  
に結びついており、家というものが小農經營の維持に大きな役割を  
果してゐることになつてゐると思ふのです。

〔喜多野〕……するとやはり、有賀さんがいふような家産維持とか  
体面とか、家の制度の精神的影響が加わつてゐるのではないですか。  
〔木下〕……そうでしょうね。元來日本では資本主義が特殊な成立  
と発達をとげたことのため、古い家の制度特に農村のそれが  
充分分解してゐない。しないから古いイデオロギイ的要素が残存し  
てゐて、それが逆に農業經營のやり方や農家經濟に影響し或いは反  
作用を与えてゐると思ふのです。しかしそれも資本主義經濟という  
ものの成立と發展との係り合ひによつて維持されてきた小農經濟の  
特長、例えば家屋敷や農地等が生活手段でもあり、生活手段でもあ  
るという状態、有賀さんのいわれる家産という觀念や自家努力を無  
償のものとする考え方を存続させてゐる生産と生活の仕方によ來す  
この点で、家の問題は重要だと思ひます。

〔有賀〕……分解しない、分解しなかつたというのには、  
〔木下〕……それは結局、農村人口を都市産業が充分に吸収し家族  
制度を近代化することができなかつたという特殊な資本主義の性格  
に關係してゐるのです。

〔有賀〕……もう一つ、日本で資本主義が欧米のように発達しなかつた  
つたつてこの条件はいろいろあると思ふが、社會關係についての  
基本的な態度というか考え方というか、そういうものも考えてお

た方がよいように思われるのです。例えばヨーロッパ中世のキリス  
ト教は日本の中古の氏神信仰と大部違ふと思ふのです。キリスト教  
には中世すでに個性の尊重とか個人主義的風潮とかいう傾向が出て  
ゐる。このキリスト教的個人主義思想が西洋近世の自由主義、ない  
し資本主義經濟の發達の地盤として、前からヨーロッパにはあつた。  
ところが日本にはそういうものはなかつた。明治維新以後所有權と  
いつたものが制定された。それはフランスの民法を模倣して個人的  
な所有權となつたわけですが、それ以後の経過を見るとこの所有權  
を日本では家産としてみる傾向が強かつた。家産としてつと以前  
から規定されてゐたものに、西洋の法律体系をとり入れたわけだが、  
それがどこまで實現されたか。少くとも家長個人の所有權を法律の  
中で認めざるを得なかつたが、それは逆に家長權を強める作用をし  
たという感じがするのですが、その点はどうでしょうね。

〔小池〕……問題をもう少し前へもどしてみたいのですが。過剩人  
口の問題をとりあげる過程で小農經營が問題とされたわけですが、  
日本の資本主義がその生成、發展の過程で、過小農制を土台として  
來たということを前提として——何故そういう形態をとつたのかは  
一まず置いて——労働力が家に縛られてゐる、その面を小農經營の  
中からみれば、食糧の自給という点が一つあるのじやないか。そう  
いう点を申上げたのです。それと、相互に補充しあふ低賃金の問題  
です。そして、その外側に日本資本主義におけるエンプロイメント  
の問題がある。しかしエンプロイメントがすくないというだけでは、  
農村における過剩人口の問題はとけない。農村における過剩人口の  
問題を考えるためには過小農制の問題にしなければならぬと思ふ  
のです。

そこで小農經營と家の問題を考える場合、それがすぐに結びつく  
というわけにはいかならないではないでしょうか。徹底した小農經營  
といひますか、封建的な諸制限をこわして自由な土地所有に基礎を  
おいた小農經營、そういうものはかえつて個人主義思想の担い手と  
なる場合もあると思ふのです。ですから、小農經營の、日本におけ  
る特殊な形態、そういうところに、家の問題なり、社會關係につ  
いての特殊な態度なりというものが出てくるのではないかと思ふので

すけれど……

〔註〕

この間、小池、有賀兩氏の間に、日本における農業経営  
ないし、小農経営、及びそれに関連して日本人の考え方  
についての討論があつたが、録音機故障の爲、記録不能  
はいろいろです。小農経営そのものだけを考えれば、日本だけの問  
題でなく、ヨーロッパにもあればアメリカにもある。たゞ一般的に  
農業経営の問題だけではなく、それをささえている経済的・社会的  
条件のなかでそれを考えなければならぬ。ですから、個人主義が  
発達しなかつたから、日本では家族経営がとられたんだ、という  
のではないように思います。そういう考え方は、農民の考え方、部落  
の考え方にも関連してくるわけです。

〔松原〕……小池先生のさつきのお話の中では、小農経営の他に、  
もう一つ村内の準備の不安定性といつたものがある、ということ  
でしたが。

〔小池〕……そうです。過剰人口を考へる場合には、その点をも問  
題にしなければならぬ。過剰人口の停滞性と村内準備の不安定性  
との関連です。

〔松原〕……御報告では逆に雇傭性が安定してきたから村内人口は  
大きくなる、という結論を出されてきたわけですが、そうすると過  
剰人口といつた規定の中で、村内準備の不安定性はどのように位置  
づけられるのでしょうか。

〔小池〕……あの調査村に關する限り雇傭の不安定性の中に、過剰  
人口を考へる根拠があるのではなからうか、という論理を展開した  
わけです。ですから一定の安定した雇傭を有する就業があるとすれば、  
それはもはや停滞的過剰人口ではない、と申上げたのです。

〔大内〕……そうしますと停滞的になる以前の過剰人口は、やはり  
潜在的過剰人口の範疇に加えるわけですね。

〔小池〕……過剰人口の一つの存在形態として、停滞的過剰人口と  
いう形がとらえられると思つて、ですから停滞的でなければ潜  
在的過剰人口が内在していたかもしれない。ですから過剰人口の存  
在形態を考へれば、停滞的過剰人口と潜在的過剰人口との二つが考

えられる。

〔大内〕……日本の農業では、たゞ農業の停滞性が過剰人口の基礎  
になつてゐるのではないでしようか。たゞ農業での停滞性というの  
ではなく、日本の資本主義全体が過剰人口を基礎にもつてゐるので  
はないかと思つます。だから日本の資本主義全体の停滞性ではない  
でしようか。先生の主張は、農業における過剰人口の存在、或いは  
停滞が、農業における資本の蓄積の過少に求められるとおつしやり、  
そして農業の生産性を低め、生産力が余るといふようにおつしやり、  
たと思つたのですがそれでよろしいのですか。僕のおき、したいのは、  
先生は過剰人口自身を存在させる基幹に日本農業自身の生産力だけ  
を置かれようと思つたのですか。

〔小池〕……もちろんそういうことではないんです。先ほどから問  
題になつてゐるんですが、今度の私の調査の結果を中心として話を  
展開させたので、農業経営という面から問題を出してたのですが、  
しかし一般的に過剰人口の問題を問題にするとすれば、日本資本主  
義の中における農業のあり方を背景にして当然考へるべきでしよう。  
それを捨象して全然問題にしないといふわけではもちろんないので  
す。これは一応前提とされてその上で調査結果の分析を中心にした  
まです。

〔大内〕……わかりました。そうしますと、次に農村の過剰人口の  
具体的な存在形態を規定するモメントとしていろいろあると思つた  
のですが、そのモメントが具体的にどういふものであるかといふこと  
を抜きにして、日本の資本主義の特質として小農経営での特殊性  
を、あまり直接的に過剰人口の存在形態の規定と結びつけたような  
気がするのですが、この点ではやはり、過剰人口の存在形態と、小  
農経営の特殊性の関係をみてゆく問題とそれをどう発露させて、日  
本の農民が家から離れられないか、という問題を考へてゆくのか。  
そうした点の関連はどうなんでしょう。何か、あまり一般的で……  
〔大内〕……もう少し問題を整理して。

〔喜多野〕……過剩人口と家から離れられないという問題と……、  
どうも私の整理のまずいのは、過剩人口の問題ではなくて、過剩疲  
勞の問題らしいんですか。(笑声)

〔木下〕……過剩人口の問題から進展して、これは結局農村の「家」  
というものにひつかかってくる、というところまで行つたんじゃない  
ですか。それで、そういう意味での農村の家の問題で、もう少し  
社会学の方にお話頂けると……

〔福武〕……それでね、原君の報告にありましたね。基本的には、  
家の存在を規定する経営形態は、戦前戦后を通じて一貫している  
といわれたのですが、戦后における変化が多少ともあるのか、それと  
も全然変りないのか、その点をお話ねがいたいのですが。

〔並木〕……例えば農家戸数をみると一定数が維持される傾向は一  
貫して変つていない。ところが、一定数を維持した条件を考えてみ  
ると戦前と戦后とは、又もつとさかのほれば、明治から二回の戦  
争を経て大正に至るまでもそうですが、かなり条件が變つてい  
ると思う。一言でいえば、戦前は工業の未発達に原因している。戦后は  
工業の発達を前提にして、いわば家が維持されてきている、という  
差があると思う。要するに戦后は独占資本のあり方といふますか、  
それがどれだけの力をもっているか、ということと結びつけて農家  
の数をみて行かなくやならないと思う。未発達という面が全くなく  
なつたとは思いませんが、つまり一定数を維持するメカニズムが、  
というのが一つの大きな変化です。もう一つは、何となく感じる点  
ですが、例えば、いま有賀先生のお話をきいたのですが、家族関係  
ということを中心にした結びつき方がかなり變つてきたと思ひます。  
たゞ土地に結びつけられた限りの家族関係はどうか。農民が土地  
に結びつけられているという面、これは具体的には食糧生産と結び  
つくかもしれません、その面は變つていないのではないか。もう  
一つは、はじめにいつたこと、関連しますが、外の条件がすつかり  
變つた。極端にいえば戦前は農村が労働力の独占的な供給源であつた。  
都市は補充すべき労働力を再生産するのがやつとで、拡大再生産し  
ても非常に小規模にとゞまつていた。それが戦后はつきりと都市は  
労働力の供給源として農村と並ぶまでになつてきた。この点は日本

の場合を考えると大きな変化だと思ふ。それと結びついて生じて来  
るのは、失業者を農村家族におつかふせよということが困難になつ  
てきたことです。もつとも失業者や整理された労働者の場合には、  
大きなものではなかつた。しかしともかくそれを農村におつかふせ  
るにはある幅があつた。だからそこまではきわめて容易にできた。  
それ以上はできないという底の浅いものではあつたけれども、とに  
かく戦前では、その中では自由であるような幅があつた。ところが  
戦后ではこの幅がなくなつてきている。だからそれ以上失業者が出  
ると、もつと失業保険などの社会政策をしつかりやらねばならない  
このことと農業以外の労働者がふえてきたという条件との二つの条  
件があるわけです。その基盤は労働力構成の変化に求むべきものだ  
と思ふ。家のあり方に規定された人口移動については、家の内約変  
化もあるが、同時に外の変化の方が相当大きいのではないかと思ふ。  
この点は今日は御報告できなかつたのですけれど。

〔福武〕……外の変化もあるから家のあり方も變つてきている。こ  
のことはもちろんいえるのですが、長男でも外に出て行くという問  
題なのですか……

〔註〕 ……福武氏の原氏への質問が出、原氏のそれに対する  
説明があり、それを受けて、並木氏の発言あり。その後  
福武氏の並木氏に対する反問があるが、録音機故障の爲  
記録不能。並木氏の回答の途中より録音さる。

〔並木〕……所得の面で見れば潜在的過剩人口はふえてきている。  
しかし経営の維持とか、「家」ということを考えれば、それに必要  
な労働力の単位は動いていない。資源の移動という面からみれば戦  
前と戦后では基本的な変化があつたとはいえないと思ひます。

〔福武〕……僕がおききしたいのはその問題じゃなくて、一度外へ  
出たものが、失業かなんかで首を切られて帰ってくる。その場合の  
その家の人がうけたという……

〔註〕 ……福武・並木両氏の押問答が続くが録音は不明瞭。  
〔福武〕……「一定の幅の中では自由だ」という場合の、その幅  
なんです。その幅が戦前に比べて戦后では小さくなつてい  
る。  
〔並木〕……まあ傾向としては小さくなつたといえるんだけれども

〔喜多野〕……過剩人口と家から離れられないという問題と……、  
どうも私の整理のまずいのは、過剩人口の問題ではなくて、過剩疲  
勞の問題らしいんですか。(笑声)

〔木下〕……過剩人口の問題から進展して、これは結局農村の「家」  
というものにひつかかってくる、というところまで行つたんじゃない  
ですか。それで、そういう意味での農村の家の問題で、もう少し  
社会学の方に話頂けると……

〔福武〕……それでね、原君の報告にありましたね。基本的には、  
家の存在を規定する経営形態は、戦前戦后を通じて一貫している  
といわれたのですが、戦后における変化が多少ともあるのか、それと  
も全然変りないのか、その点をお話ねがいたのですが。

〔並木〕……例えば農家戸数をみると一定数が維持される傾向は一  
貫して変つていない。ところが、一定数を維持した条件を考え下み  
ると戦前と戦后とは、又もつとさかのばれば、明治から二回の戦  
争を経て大正に至るまでもそうですが、かなり条件が交つてい  
る。一言でいえば、戦前は工業の未発達に原因している。戦后は  
工業の発達を前提にして、いわば家が維持されてきている、とい  
う差があると思う。要するに戦后は独占資本のあり方といふますか、  
それがどれだけの力をもつているか、ということと結びつけて農家  
の数をみて行かなくやならないと思う。未発達という面が全くなく  
なつたとは思いませんが、つまり一定数を維持するメカニズムが、  
というのが一つの大きな変化です。もう一つは、何となく感じる点  
ですが、例えば、いま有賀先生のお話をきいたのですが、家族関係  
ということを中心にみた結びつき方がかなり交つてきたと思ひます。  
たゞ土地に結びつけられた限りでの家族関係はどうか。農民が土地  
に結びつけられているという面、これは具体的には食糧生産と結び  
つくかもしませんが、その面は交つていないのではないか。もう  
一つは、はじめにいつたこと、関連しますが、外の条件がすつかり  
交つた。極端にいえば戦前は農村が労働力の独占的な供給源だつた。  
都市は補充すべき労働力を再生産するのがやつとで、拡大再生産し  
ても非常に小規模にとゞまつていた。それが戦后はずきりと都市は  
労働力の供給源として農村と並ぶまでになつてきた。この点は日本

の結合を考えると大きな変化だと思ふ。それと結びついて生じて来  
るのは、失業者を農村家族におつかおせるといふことが困難になつ  
てきたことです。もつとも失業者や整理された労働者の場合には、  
大きなものではなかつた。しかしともかくそれを農村におつかおせ  
るにはある幅があつた。だからそこまではきわめて容易にできた。  
それ以上はできないという底の浅いものではあつたけれども、とに  
かく戦前では、その中では自由であるような幅があつた。ところが  
戦后ではこの幅がなくなつてきている。だからそれ以上失業者が出  
ると、もつと失業保険などの社会政策をしつかりやらねばならぬ  
このことと農業以外の労働者がふえてきたという条件との二つの条  
件があるわけだ。その甚盤は労働力構成の変化に求むべきものだ  
と思ふ。家のあり方に規定された人口移動については、家の内的変  
化もあるが、同時に外的変化の方が相当大きいのではないかと思ふ。  
この点は今日は御報告できなかったのですけれど。

〔福武〕……外的変化もあるから家のあり方も交つてきている。こ  
のことはもちろんいえるのですが、長男でも外に出て行くという問  
題なのですか……

〔註〕こゝで福武氏の原氏への質問が出、原氏のそれに対する  
説明があり、それを受けて、並木氏の発言あり。その後  
福武氏の並木氏に対する反問があるが、録音機故障の爲  
記録不能。並木氏の回答の途中より録音さる。

〔並木〕……所得の面で見れば潜在的過剩人口はふえてきている。  
しかし経営の維持とか、「家」ということを考えれば、それに必要  
な労働力の単位は動いていない。資源の移動という面からみれば戦  
前と戦后では基本的な変化があつたとはいえないと思ひます。  
〔福武〕……僕がおききしたいのはその問題じやなくて、一度外へ  
出たものが、失業かなんかで首を切られて帰ってくる。その場合の  
その家の人がうけたという……

〔註〕こゝで福武・並木両氏の押問答が続くが録音は不明瞭。  
〔福武〕……一定の幅の中では自由だ、という場合の、その幅  
なんです。その幅が戦前に比べて戦后では小さくなつてい  
〔並木〕……まあ傾向としては小さくなつたといえるんだけれども

本質的には変つていない。

〔註〕 ことば再び福武・並木両氏の押問答)

〔福武〕……しかし家族関係は變つて一般には認めていけるわけでしょう。男は食えねば外へ当然出てゆくという意識が強まつてゐる。このことは逆にいえば、福がせまくなつたということだ。たゞ現実の問題としてとれだけ……

〔並木〕……結局構造と結びついて論じられるべき概念だと思ふ。

〔福武〕……どういうデーターにもとづいてゐるかといわれるが……これはたゞ感じなんですからね。家に対する概念という点で、たしかにそういうことがいわれるのではないでしようか。それを傍観するデーターをあげるとすれば、戦後すぐ戦災や引揚などで帰つた人たを調べてみただけですが、東北地方ではフリクションが起つてゐる。うまくいつてゐるのは、お嫁さんの里へ帰つてゐる。当然帰るべき長男の家へ帰つてゐるものは大ていませう。そのまづさが地域的に遅れてゐるとか、進んでゐるとかははつきりいへませんが、先進地帯の方が程度が高いのではないかと思ふのです。

〔並木〕……今は帰りにくくなつてゐる。それは確かに認めるのですが、その場合は戦前は帰られたんだ、という前提がともかく暗黙のうちにあるのだと思ふ。

〔福武〕……戦前は農村へ帰られたし失業したものが、ほとんど帰村したと簡単に考えられてきていた。しかし実際には大幅なくび切りもなかつたし、失業してもどうにもできないものだけが村に帰つてゐたんだ。大ていのは小商売かなんかをして何とかやりくりする。そういう具合だつた。

〔並木〕……戦前は帰つたが戦後は帰らない。そのような理解が問題だということです。たゞ帰るにしても幅が狭かつたが、戦後はより狭くなつた、というのなら僕は納得しますよ。

〔福武〕……以前から比べれば労働者の生活は余程よくなつてゐる。農村の人の労働者に対する見方がちがつてきた。戦前は労働者は低収入、可哀そうだ、という見方があつた。ところが今は變つてゐる。労働者の方が楽なんだ。楽をしたものが、失業して村に帰つて来ても楽をしてたんだから、という意識がある。そういうつたことも

考え方の一つの基礎になるでしよう。

〔原〕……農民の労働者に対する評価の變化は、九州についてもいえます。例えば八幡の職工街についても、職工という言葉が、私の記憶では大体戦前までいわれていた。それが今では、職工という言葉は日常会話の中にも出てこない。商人なども、「工具さん」という言葉より、更によい言葉を探そうとさへする意識があります。この点僅かに労働者に対する評価のちがいが出てきてゐる。事実、北九州特に八幡などでは製鉄の工具といふのが最も安定した階層な

〔並木〕……戦後農家から出てゆく階層をみると、労働者になる人々についてですが、かなり上層からも出て行つてゐるということはいえると思ふ。というのは戦前の上層は大てい職員といひますか、ホワイト・カラーの方に出て行つた。もう一つ、戦前は産業労働者の中で、農村出身者の割合が非常に多かつた。そして、昭和初期では軽工業中心だつた。その後には重工業が伸びてきたが、こゝでは農村出身者の割合は相対的には低かつた。ところがその重工業は戦中からさうつと發達してきたが、戦後になつてもその傾向は残つた。つまり農村出身者の割合が低い重工業が残つて、しかも農家の出身者の割合が、同じ重工業の中の産業をとつてみると、戦前に比べて減つてきてゐるということがいえるのではないか。もつと極端に割切つていへば、戦前の軽工業段階の時には、男は才三次産業に出ていた。それが戦後どこへ行つたか。重工業の中の比較的賃金の高い機械工業などをみてゆくと、はつきりとそれは都市労働者の産業の性格をもつてきてゐる。農村から都市へ出て行く場合の産業の職種が、外見적으로는昭和の初期にもう一度逆戻りするといふ大きな傾向をとらざるを得ないような条件がある。この点は甚だ大專だと思ふ。

〔福武〕……その点はますます強化される傾向があると思ひます。今度学会の締りに八幡で三菱化成、三菱セメント、旭ガラスなどの工場に行つてみました。そこでも合理化がすすむほど人が要らない。規模は大きくなつてもそれほど労働力は吸収されない。又技術が進むほど農村出身の素練労働者は「ち」があかない。従つて農村の子弟はなかなか大産業には入れない。そこでせしめられて不安

ていうと、低賃金ということは、そういうことだと思ふ。

〔南〕……わが国における農家総数にあまり変動がなかつた原因の戦前も戦後もそうなのですが、資本主義が農民をたゞきつぷそうとすればできないことはないけれども、実際にはそれが行われなかつた。その理由として保守党の地盤はおくれた農民だし、農地改革後の農村は、特に反共の基地という面からも政府は重視している。又兵力を考へる場合にも、農民を叩きつぷそうとは決してしない。又これは日本の場合だけでなく、英米でも中農保護政策という名のもとにこういうことをやつている。

〔並木〕……確かにそういうことはあるでしょうが。たゞ英国の場合にはちがうと思ひますが。次に小池先生もおつしやいました。が、農家戸数が変わらなかつた。ということを基礎にして、農家人口が動いていないということは、日本の場合だけでなく世界的なこと。ん独占資本の政策だということは確かにいえるでしょうが、基礎的な条件やメカニズムは、もつと経済学的に説明できるのではないでしようか。そのようなメカニズムの上につて、政策が出てきていると考へられる。例えばわが国の歴史をみると、長い間インフレ政策をやつてきて、ほんの少ししかデフレ政策はやつていない。デフレ政策を徹底すれば人間が、都市にあふれて失業者が顕在化したでしよう。日本経済がこれを支えうるかという、多分出来ないうでしよう。だから企業の合理化を徹底的にやつて日本の経済を押し進めるといふことはできなかつた。それですぐにインフレ、更には戦争とかになつてきたのではないでしようか。

〔大内〕……今までのお話は主として完全離村についてでしたが、それとは別に兼業の形態についても問題だと思ふのですが。

〔並木〕……兼業の推移についてですか。統計的にみて割り切つていへば、戦前は兼業が主で兼業が従でつた。稼いだ金で農業の設備などの方に資金をまわした。ところが戦後は兼業が主で農業が従となつてゐる。これは戦前・戦後の他産業の未発達、発達との関係からいえることです。だから現在の兼業農家に、農業生産の担当者とし

ての資格を要求するのは、原則的には間違ひだと思ふ。

〔大内〕……ですから、完全離村の場合と同じような考へ方をなさるわけですね。

〔並木〕……支える条件の変化という意味ではそうです。

〔喜多野〕……けれども一面において、その方が具合が悪いという場合もあるでしょうし、又兼業をもつた農家といつても、全部じやなくてある一部分ではないでしようか。

〔並木〕……こゝで僕は兼業農家を支えている条件といつたものを申上げたのです。

〔喜多野〕……そうしますと、日本農村の過剰人口はどうなるでしようか。今まで外からの関係は大部論じられてきたのですが、農村自体の中ではどんな風な形をとつてゐるのでしようか。つまり一面において兼業農家という形で潜在している、ということなのですか。

〔並木〕……兼業と過剰人口……どうも質問の意味がよくわからなうのです。

〔喜多野〕……つまり小池さんのいわれた停滞性ということですが、〔並木〕……僕もそれをおき、したいのですが、停滞性と潜在的と

いうことはどこを区別されてゐるのでしようか。

〔小池〕……潜在的というのは、例えば、農家の労働力として吸収されているのですが、しかしその生産力の下では充分な生活ができないう意味で潜在的なんです。表面に出てこないから。

〔並木〕……それでわかりました。では停滞的というのは、〔小池〕……停滞的というのは、現在就業はしてゐるのです。するけれどその就業は非常に不安定で非定期的なんです。従つて一定の規則的な完全な就業状態とはいえない。

〔並木〕……例えば、そうしますと、農業に五十日しか働いていなう、という場合、これは停滞的なのですか、潜在的なのですか。

〔小池〕……それは一応農業外の労働とを区別して、一方で農業労働として吸収されていながら、しかもそれによつて非常に低い生活しかし得ない。

〔並木〕……これを潜在的といふのです。



タスが高いが、一方は青年や夫の方が高いといつたことについて、何かお話を……

〔中島〕……その点については簡単に申上げたのですが、要するに平村の場合は全般に農家としては大へん程度が低いというか農家としての条件に恵まれない家が多分、農家というより主に兼業労働に依存している半農半労といつたタイプに属します。そこで家のステイタスはどういふ風にきまつてくるかという、まず相倉の場合には、開墾によつて大きな変化を受けなかつたといえるのですが、が外に出ている。相統者は四三名中一四名、非相統者の場合は七一二で後に残つた家族は、世帯主の場合でも比較的老年の者、女と子供が多く、妻が労働の中心とならざるをえないことになる。中には傍系親、例えば弟の妻だけ後に残つて外へ出るといふ形がでてくるわけです。家を守り畑を守る負担は主として女にかつてくるので、そういう場合、同族のつながりより嫁の実家とのつながりが非常に強くなつてくるのが一つの特徴です。それからたまたま青年の力を家族内部にもつている家は相対的に発言力が強くなつてくる。まゆ、和紙、薪炭原木伐採などの共同作業では女はついでゆき仕事をまよめ、その名儀で一括して農協に納めるのですが、どうしても男の労力をもつ家を中心になるわけですが、こうした場合、どうしても一般的で多くの家は家族の現任形態が二つに分割されている。年輩者で妻をつれていつているものも少しはあるが、その場合でも老人子供は残される。生活程度のもがいと低賃金とから、やむなく離れていけるのは仕方がないといつた形で、また出稼先の職業も必ずしも安定しているわけではないから、いざという場合の用意も必要です。だから部落だけに限定して考えれば、家を守るとか土地にしばられることは負担になつていゝ家が多いわけですが、出稼の不安定なことからみあつて現在のような過渡的な家族形態をとらざるを得なくなつてくる。ノーマルな直系的家族構成をもつ少数の家族の相対的ステイタスか、部落を単位とすれば高くなり、部落中心の仕事が、こうした家を中心に行われる仕組みとなりこのことは特に戦後強くな

つてきた。このような状態の推移は、内外の条件とにらみあわせて考えていかねばならぬと思ひます。それから、祖山部落の場合には、その妻や若人夫婦が山や畑の仕事をする、といつた職工農家の形をとつていゝ。しかも勤務所が大企業系列に属し、賃金収入も村の現金收支の水準からみると大きなウエイトを占める。そこでこの部落では、発電所に勤めるものを出している家、特に正式に社員としての勤務者を出している家とそうでない家との間には、例えば賃金収入などについても大きな隔差がでてくるわけです。いま一つ、この部落では古い世代は、まゆや薪炭などの兼業や出稼で、兼業農家として家をよくする考えが強いが、三十代以下の勤務者の場合には、農業は飯米程度の田を作るにとよめ、共同作業を要する兼業にはあまり関心を払わない。世代間に明らかに生活態度の差が出てくるし、現金収入の多いもの、発言力が高くなつてくる傾向があるようです。例えば家屋の改造、特に共同作業を要する合掌作りの屋根の互ぶきへの変更や、家屋内部の造作の改造などが進んでいるのは、この部落の特定で家とみればその生活態度や生活様式が推定されるのも、新しい傾向の影響のようと思われまふ。

〔井森〕……二つの部落をおやりになつて比較されたのですが、地域差の偶然的なものがそこに入つてきて、それが結果に影響してくるとも考えられる。例えば人口の動態などでも、三つ位の部落の平均で比較される方が科学的だと思ひますが……

〔中島〕……調査は四つの部落をとつてやつたのですが、こゝではいわば極端と極端といつたはつきりしたちがいの出てくることを対照的に比較してやつたわけです。従つて平均ではなくて典型的な事例の意味をもつていゝ。まよめる場合には標本的代表性も一応考慮にいれねばならないと思ひますが、ぬらいはすこしちがうところもあるわけです。

〔喜多野〕……その点は報告でもふれて居られたと思ひます。家にしばられるということも家の制度の要求でしぼられていゝのと、経営体としての農家の条件でしぼられるといふのと両方あるわけですが……

〔中島〕……家にしはられるという場合、従来は家中中心にしはる種極的な面が強調されてきたが、これを消極的もしくは、ネガティブな側面が一方にあると思う。例えば、長男は残れる、残らねばならぬという場合のしはり方と、二三男が外へ出て行く、その方が家面とが相統いて、家の体制を維持してきた。この場合、子供や厄介者を折出す家の技能が、やはり家族主義の要件となつていゝるのではないか。しかもこのように二側面のいづれが強くなるかは、家の可能な条件、例えば家産分与の可能性などに依存しており、いづれとも一概に決められない。特に家族員をしはらないで外へ押し出す機能は昔からあつたし、低い層の農家では特に強くあらわれてくる。従来の家族や同族の研究が、どちらかという中層以上の農家を中心に見られてきたために、こういう機能はあまり注意されなかつたが、今後はこの点も家族意識などと結びつけて、もつと綿密に分析する必要があるのではないでしようか。

〔喜多野〕……この点は非常に難しい問題で、一概に従来の研究がどうこういえないようにも思われます。いづれにせよ、今後は大いに研究すべき問題ではあると思われませんが、大体時間もだいたい過ぎましたので、こゝらでこの討論を終りたいと思ひます。

(拍手)

おまけ

才三回大会の共同課題としての「討論記録」をおとどけたいと思います。半年末の雑務にわずらわされ、延引いたしましたことをおわびいたします。この記録は録音にもとづいて作成したものです。大阪市の山本登氏にもつばら面倒な仕事を担当して頂きました。何より同氏の御尽力を深謝いたします。なお、この記録原文は発言

の方々にお題して、校閲して頂いてあります。そのため、かなり時間がかかりましたが、一応万全を期したつもりです。関係各位の御協力を併せて感謝いたします。

本年一月の世話人会の席上で、本年度も「農家人口の変動と家族構成」という前年の共同課題をひきつづき検討することに決定しました。この記録もその研究を進めさせるために、特に「研究通信」の別集として、会員全部に御わけすることになつたものです。何卒その点御了解の上、どしどし御意見を「研究通信」に御寄せ下さい。

本年度の年報も、共同課題を離れて、「村落協同体の構造」といふテーマを中心に、諸方面の寄稿を仰ぎ、編集いたしましたことにきましました。なお、詳しくは次の研究通信でお知らせいたします。その点も併せて御含み下さい。

実は研究通信と一緒にこの別集を御届けする予定でしたが、時期の関係か原稿が充分でないで、別にしました。どうぞふるつて御寄稿のほどをねがいます。

なお、この別集は少々大部の上、臨時のものでもありますので、かなり会計上はむりの点もあります。会費の払込方を活版にして頂かねば、今後の運営に支障も生じますので、御協力をねがいます。できるだけ研究室などでとりまとめ御送金下さい。(口座番号は東京一三二八八六です)

四月をむかへ研究の意欲もあつたから新たなものがあるでしょう。各位の御研精の一端をどしどし御発表下さるよう重ねてねがいます。

(竹)

おまけ